高等学校国語　その2

外、もう一つあった。それは寺院の現実の懺悔室であり、回心について書かれた懺悔録であった。現代のフランスの一理論家ブレモンが、詩は祈りであると言ったとき、それはこの時期の詩の伝統の生きている国においてダトウであった。

しかし多分、ボオドレエル時代から、あるいはブレイクの時代から、抒情詩は、公衆の前で歌われるという約束が空虚であることが反省された。詩は音楽に依拠せず、言葉自体の中に音楽を持とうとするようになった。その時から詩もまた一人の人間が一人の室で読むものとなった。そういうものとしての思念の、また表現の細心さと大胆さ、告白の迫真性と人間の悪と罪の意識の昇華の道が、詩の中に開けたのであろう。それは方法としてのサンボリスムを生んだ。

そしてこの二つの流れが、つまり公衆のために朗誦された物語りと、音楽にまぎれて僅かに他人の面前で詠嘆された抒情詩とが、一人の室で書かれ一人の室で読まれる内密なる個我の発露の芸術としての新しい小説と新しい詩に変化するようになった。それを私は散文においてはトマス・マンの言に従ってルソオの時からと見てもいいし、又はスタンダアルとしてもいいし、またより意識的な芸術として小説を書いたゲエテとして見てもいいと思う。またそれはゲエテが最も人間らしい人間と見たヨリック氏即ちスターンであってもいい訳だ。詩においては十九世紀初頭のブレイクまたは中葉の「悪の華」の時代からと考えたい。このエスキイスは各国において、さまざまに適用されるであろう。そしてキリスト教国にあっては、古い宗教上の懺悔と告白の道が、この新しいエゴ充足の芸術にも忍び込んで、否むしろそこでより十分に生きて、全人間的なものを、そのまま善でありたいとして訴える衝動が満足されたのだろう。

この両者が更に合流して二十世紀文学を作っているように見える。小説はあらゆる文学形式の流れを綜合して大きな海洋になったとチボオデがガイカツして言っていることの内容を、私はこんな風に考えながら是認するのである。そして、そのように考えることによって、私たちが学んだ十九世紀から二十世紀前半へかけてのヨーロッパの文学が、実に告白と懺悔を基調として持ち、作者のエゴとの合理的関係を設定しなければならぬ対象としての人間社会の描写を持ち、また情感として秘密の慾情の展開を伴い、そして自己の内心の訴えによって、自己を抑制するものなる既成道徳を疑う衝動と、救いを求める呻きとを帯びていることを、つまり小説というものが作者その人の内なるひそかな発言をその核として持つことの理由を理解したいのである。そういうものである小説が、どうして自伝の要素を離れて成り立つことができよう。

（伊藤　整「小説の方法」による）

（注）

アルベエル・チボオデ＝フランスの文芸批評家。　エスキイス＝下絵。スケッチ。

(一) ═線部分(ア)〜(オ)の片仮名をそれぞれ漢字に直して書け。

(二) ─線部分①について、このことを端的に述べた部分を、本文中から三十字以内で抜き出せ。

(三) ─線部分②とはどういうことか、説明せよ。

(四) ─線部分③とはどういうことか、百字以内で説明せよ。

(五) ─線部分④の成立過程を説明せよ。

(六) ─線部分⑤とはどういうことか、説明せよ。

(七) ─線部分⑥について、「この両者」とは何かがわかるように、二十世紀文学の特徴を説明せよ。

(八) 伊藤　整は日本の小説家について、「逃亡奴隷」と論評したが、それについてわかりやすく説明せよ。

［二］　次のア〜クの文学作品について、(一)、(二)の問いに答えなさい。

ア	小説神髄	イ	無名抄	ウ	日本永代蔵
エ	俘虜記	オ	十六夜日記	カ	明月記
キ	俳諧御傘	ク	雨月物語		

(一) それぞれの文学作品の著作者名を書け。

(二) ア〜クの文学作品を、成立年代の古いものから順に並べ、その符号を書け。